

東南アジアの港市の統合に果たす奴隷・混血者の役割：

広域秩序と地域秩序の形成媒体

研究代表者 立教大学文学部 教授 弘末雅士

1. 研究目的

インド洋を介してインドや西アジアと交流し、南シナ海を介して中国とつながる東南アジアは、周辺地域と比し人口が過少だったことも手伝い、古くから周辺諸地域より多様な来訪者や移住者を受け入れてきた。本研究計画は、植民地体制が構築される前夜の18世紀後半からその体制が確立した20世紀前半までの東南アジアの港市に焦点を当て、外来者との交流において重要な役割を担っていたと考えられる、奴隷や混血者さらには現地人妻妾の存在に着目する。

19世紀後半に欧米の植民地支配が本格化する以前の東南アジアの港市には、欧米人のみならず、華人系住民、アラブ系住民、インド系住民、さらには混血者らが現地住民と共存し、外来者たちの周辺に少なからぬ奴隷が存在した。また外来者の間では、しばしば現地妻を持つ習慣が存在した。彼女らは、地元の有力者の斡旋により外来者のもとに配され、家事を司るとともに、現地社会の言語や慣習を教える役割を担った。また現地妻との間に子供ができると、父親がその地を去った後も、母親と子供はその地にほとんどが留まった。19世紀終わりごろまでの東インド（現在のインドネシア）では、欧亜混血者とその子孫が、「ヨーロッパ人」の法的地位の人口の過半数を占めた。

19世紀に入ると奴隷取引の禁止の声が高まり、オランダ領東インドでも1860年に奴隷は廃止された。また1870年代以降ヨーロッパ本国で性モラル向上運動が盛んになると、正式な結婚を伴わない現地人女性との同棲は厳しい批判を受け始めた。こうした圧力に抗し切れず、20世紀に入るとオランダ植民地政庁は、従来の方針を変更せざるを得なくなった。また1910年代から、現地人有識者のあいだでインドネシア民族主義運動が展開し始めると、彼らは、オランダ人や華人が現地妻を有することを厳しく弾劾した。

それにもかかわらず、インドネシアでは1920年代、30年代においてもヨーロッパ人男性と同棲した現地人女性の数は減らなかった。主要な都市には、欧亜混血者や華人系住民の経営する出会いの場が設けられていたためである。本研究は、18世紀後半から20世紀前半期にいたる東南アジアのなかでも多様な来訪者と交流した島嶼部を取り上げ、そこにおける奴隷や混血者さらには現地人妻妾の役割に焦点を当て、彼らの介在により他地域出身者と現地人とが共存する植民地社会が構築されたことを解明する。21世紀のアジアにおいて、人々が多様な個性や伝統を保持しつつ、共存・共栄できる原理やシステムを構築するためには、地域性と国際性とを媒介できるしかるべき仲介役が必要となろう。しばしば負のイメージを課せられながらも、それゆえに地元社会と広域秩

序圏との仲介者となった東南アジアの奴隷・混血者・現地人妻妾のような両義的存在は、そうした役割を考察する上で、十分な光が投げかけられるべき重要な研究対象であると考えられる。

2. 研究プロジェクト実施状況の概要

プロジェクトのはじめにまず、奴隷や混血者をめぐる史料がどのくらい残されているのか検討した。奴隷は上述したように、重要なテーマであるが、奴隷取引を除くと、彼ら活動を記す史料は、断片的にしか残されていないことが判明した。それに比して、混血者とりわけ欧亜混血者については、比較的豊富に史料が残されていることが明らかとなった。そして、欧亜混血者とともに、彼らを生んだ現地人女性についても多くの史料が残されていることが判明した。

奴隷が存在した時代、女奴隷が外来者の同棲相手になったこともあったが、そもそも東南アジアには長期滞在する外来者のために、地元の有力者の斡旋により、現地妻が紹介される慣習が幅広く存在した（注1）。インドネシアでも、19世紀にオランダ植民地支配が本格化する以前の時代から、現地妻を持つ慣習がインドネシア人のあいだで幅広く共有されていた。その後やってきたオランダ人をはじめとする他のヨーロッパ人や華人も、この慣習を受け入れた。

そこで報告者は、18世紀の後半～20世紀の前半期の時期における外来者の現地妻となった現地人女性やその子孫の欧亜混血者や華人系住民に光を当て、とりわけ19世紀終わりから強化される植民地支配のもとで、彼らがどのような変遷をたどったのか、解明することとした。というのも、近年のジェンダー研究や帝国と性モラルをめぐる研究が、欧米の植民地支配や帝国形成が進展する19世紀後半よりの性関係をめぐる規範やその変化について、活発に議論を進展させており（注2）、本課題が対象とするオランダ植民地期インドネシアの事例が、そうした研究に寄与できる点が少なからずあることが予想できたからである。なお、報告者が史料調査にあたった主な場所は、オランダの国立公文書館（ハーグ）、王立図書館（ハーグ）、王立言語地理民族研究所（ライデン）、ライデン大学図書館、インドネシア国立図書館（ジャカルタ）、シンガポール国立図書館、東洋文庫（東京）等である。



バタヴィアの港でヨーロッパ人にアテンドする女奴隷。18世紀中ごろの絵画。右側の奴隷は望遠鏡を差し出し、左側の奴隷はシリの箱を持つ。また傘を持つのも奴隷である（注3）。

3. ヨーロッパ側史料に描かれる東南アジアの現地妻

大航海時代以降、東南アジアに来航することが多くなったヨーロッパ人は、港町に滞在すると、他の外来者と同様に現地人妻妾や奴隷と同棲した。こうした同棲相手は、一般に港市支配者や居住区の前任者から紹介されることが多かった。同棲者とのあいだに混血者の子供ができると、彼らは港市において通訳や商人として活躍した。オランダやスペインが拠点を構えたバタヴィア（ジャカルタ）やマニラでも同様であった。ヨーロッパから女性が多数来航し始めるのは、20世紀になってからであり、とりわけスエズ運河開通以前の時代は、来航するヨーロッパ人女性数は限られていた。

一般に彼らヨーロッパ人は、奴隷を多数所有した。奴隷制度が廃止される以前の19世紀始めのバタヴィアのヨーロッパ人は、平均して十数名の奴隷を所有していた（注4）。また富裕な華人も多数の奴隷を所有した。彼らは多様な家事労働に従事していた。ヨーロッパ人と同棲した女奴隷に子供が生まれると、彼女は奴隷身分から解放され、父親が認知した子はクリスチャンに改宗させられた。

インドネシアでは1860年に奴隷制が廃止されると、強制裁培制度のもとで人口を増やした下層の現地人女性が、ヨーロッパ人や華人の同棲者となった。19世紀に入り植

民地支配を拡大しつつあったオランダ人は、インドネシアの各地域に活動を拡大した。こうしたオランダ人の現地妻になった女性は、ニヤイ（「ねえさん」と呼ばれた。ニヤイは、家事を司り、使用人の頭となり、またヨーロッパ人の主人に現地の言語や習慣を教える家庭教師でもあった。主人とのあいだに子供ができると、母親となった。こうした子供たちは、父親に認知されると「ヨーロッパ人」の法的地位を得、認知されないと母親同様に「原住民」にとどまった。父親のヨーロッパ人は、任期が過ぎるとしばしば東インドを後にした。残されたニヤイと子供たちには、家財や手切れ金が渡された。

こうしたニヤイの存在は、19世紀後半になるまで、オランダ人の注目をあまり惹かなかつた。しかし19世紀後半になると、オランダ人の女性作家が、ニヤイの献身性をたたえ、彼女らをぞんざいに扱うヨーロッパ人男性のモラルを告発した小説を書き、オランダ本国で関心を浴び始めた（注5）。またこのころより、クリスチャンの団体が、東インドで困窮している欧亜混血者の問題を取り上げ、当局にその改善を促し始めた。そしてこうした混血者を生み出すニヤイの存在にも着目し、正式な結婚を伴わない同棲関係をモラルの低下したものとして批判し始めた。

とりわけ彼らが注目したのが、比較的多数のヨーロッパ人男性が集まる東インド軍の兵舎におけるニヤイとの同棲であった。19世紀後半の東インド軍は、約3~4万人にのぼり、そのうち約25%をヨーロッパ人が占めていた（注6）。そのうち平均して2000~3000名のヨーロッパ人兵士がニヤイを有していた。兵舎におけるニヤイとの同棲は、もともと現地人の兵士が持ち込んだ習慣であった。オランダ植民地政庁は、ヨーロッパ人兵士とニヤイとの同棲は、彼らが健康生活を保ち、病気の際に看護してもらえ、性病の罹患率も低く、また正式な結婚でないため配偶者手当を支払う必要もないため、歓迎した。しかし、婚姻関係にない同棲生活と多数の混血児が残されていく状況を、キリスト教団体は、1870年代以降きびしく批判し始めた。

オランダの性モラル向上運動に携わった人々による、東インド軍の兵舎におけるニヤイの実態調査報告（1899年）には、ヨーロッパ人のニヤイ観が如実に表現されている（注7）。社会的に妾や現地妻の制度を有さなかつた彼らには、ニヤイがしばしば「売春婦」に映った。そうした彼女らがどこから送り出されてくるのか。地元の村長や郡長ら有力者が関係していることを調べだしているが、そこから先はわかっていない。

オランダは、20世紀に入るとより直接的に現地人社会への介入を試みた。学校教育制度を拡張させ、原住民社会の福祉向上を目指す倫理政策を掲げた。こうした政策はヨーロッパ本国の性モラル向上運動にも拍車をかけた。そのため、1904年にオランダ総督は、東インドのオランダ人官吏がニヤイを有することの自粛を通達した（注8）。また東インド軍のヨーロッパ人兵舎におけるニヤイとの同棲も、1913年以降禁止された。ちなみにこの1913年、オランダ領東インドにおける売春宿の経営も禁止された。以降オランダ植民地政庁には、ニヤイや非合法下で「売春」行為を営む現地人女性の姿が見えにくくなる。一方彼女らは、その後も活発な営みを続けていた。



1870年ごろのニヤイの写真。ヨーロッパ人男性と暮らすニヤイは、一般の現地人女性の服装と異なり、白いクバヤ（長い袖付の上着）を身につけた（注9）。

4. 欧亜混血者とニヤイ

地域社会の有力者を介在としてオランダ人や華人の現地人妻妾となったニヤイたちは、19世紀終わりまで現地人社会において、さほど目立つ存在ではなかった。彼女たちは地元の市場に出入りしたが、ヨーロッパ人や華人の家庭内での行動は、一般の人々にわかりにくかった。また、19世紀後半にオランダ人女流作家の小説の中でニヤイが取り上げられたことを述べたが、オランダ語で出版されたこれらの作品は、東インドの人々の注目をほとんど引かなかった。こうしたなかで、東インド社会においてニヤイの姿を多くの人々の「明るみ」に出したのは、欧亜混血者のジャーナリスト達であった。

1854年の東インド統治法によって、東インドにおける出版活動の自由が制限つきであるが、認可された。これにより19世紀後半には、現地語のマレー語による新聞をはじめとする活字出版物が、バタヴィアやスマラン、スラバヤなどの都市に登場する。当初その指導的役割を担ったのは、マレー語やジャワ語に通じ、植民地都市の状況を比較的広く把握していた欧亜混血者たちであった。その後、1880年代になると華人の編集者による新聞も加わり、1903年には現地人発行の新聞も出版されるに至った。

欧亜混血者たちにとって、ニヤイは自分たちを生み出した母であった。作家にとって、ニヤイを題材とすることは、現地人社会とヨーロッパ人社会の双方を描け、また社会の上層と下層を扱うこととなり、植民地社会をトータルに描ける醍醐味があった。ヨーロッパ人の数が増え、また社会の流動性が増してきた19世紀終わり以降、彼女らの境遇の

流転を題材とした小説が、人々の注目を引き始めた。1896年に出版されたG. フランシスの『ニヤイ・ダシマ物語』、1900年のH. コムメルの『ニ・パイナ物語』、1903年のF. ヴィゲルスによる『ニヤイ・イサ物語』などはその代表的作品であった(注10)。

彼らは、ヨーロッパ人と現地人の世界の双方を行き来した彼女たちの揺れ動く心情を描くことができた。ダシマは、彼女の金品欲しさに接近した現地人男性の真意を見抜かず、迷った末にヨーロッパ人世界から現地人世界に戻ったところ、殺されてしまう。パイナは、意地悪なオランダ人の旦那の扱いをたくみにくぐり向け、彼の死後現地社会に戻り、以前の恋人と結ばれる。またイサは、旦那のオランダ人を愛してしまい、ついには両親の説得も空しく、クリスチャンに改宗して旦那と正式に結婚し、オランダに旅立つ。これらの小説は、またしばしば劇場でも上演され、とりわけ『ニヤイ・ダシマ物語』は人気を博した。こうして小説や演劇に取り上げられることで、これまであまりその実態が知られていなかったヨーロッパ人家庭のニヤイの姿が、東インドの多くの人々に提示されることとなった。おそらく人々に、ニヤイの境遇は流動的であるが、冒険性に富んでいると映ったであろう。

1910年代になると、インドネシア人の有識者のあいだからインドネシア民族主義運動が展開し始める。運動の中で有識者たちは、オランダ人や華人が正式な婚姻関係にないインドネシア人女性と同棲することを厳しく糾弾した(注11)。ただし、インドネシア人男性がインドネシア人女性のニヤイを持つことは、特に問題にしなかった。性の規範をめぐる、民族的差異が強く持ち込まれたのである。またこれまで決して珍しくなかったヨーロッパ人と現地人との混合婚が、新聞紙上で話題となり始めた。インドネシア人有識者のなかには、ジャワ人がヨーロッパ人と本当に恋愛関係になれるものかどうか、疑問を呈する投稿者も現れ始めた(注12)。

にもかかわらず、ヨーロッパ人と同棲したり結婚する現地人女性の数は、減少しなかった。インドネシア人女性の間では、上述した小説や演劇の影響で、ニヤイの生活の華やかさに引かれた者が少なくなかった。農園企業の活動の進展に伴い、インドネシアにやって来るヨーロッパ人や華人の男性は、19世紀の終わり以降増加した。20世紀に入ると夫人同伴でくるケースが増えるが、単身赴任者も少なくなかった。彼らに対し、現地人女性を紹介する場所が存在した。出会いの場は、ヨーロッパ人が宿泊するホテル、カフェ、カンティーンなどであった。これらの経営は、主に欧亜混血者や華人たちが担っていた。それまでの地元の有力者に代わり、彼らが現地人女性を紹介する役割を主導的に担うことになった。

1910年代から20年代にかけて、インドネシア在住のヨーロッパ人の男性がインドネシア人女性と結婚する比率は増加傾向にあり、1925年ごろの統計によると、その年の結婚者の25%が現地人女性と結婚したことがうかがえる(注13)。1930年代になると、その割合は20%前後となるが、それでも1905年の15%より高い割合である。こうした現地人女性とヨーロッパ人との結婚は、通常同棲が先行し、子供ができると結婚に踏

み切ることが多かった。現地人女性のあいだで、ヨーロッパ人男性との同棲は、1910年代から20年代にかけて増えていたのである。

5. 研究成果の公表

研究成果は、様々な機会をとらえて、公表することを試みた。2006年11月25日には立教大学史学会大会において、「オランダ植民地期のインドネシアにおける現地人妻妾」のタイトルで報告した。日本も明治の初めまで、来航した外国人に「現地妻」を紹介する慣習を有しており、そうした慣習が近代においていかに変容したのか、日本史研究者と意見交換した。また2007年9月3日には、ウィーン大学で開かれた *Japan – Austrian Workshop on Cultural Exchange* において、“*The Changing Intermediary Role of Indonesian Concubines between the Local and European Communities at the Turn of the Twentieth Century*” のタイトルで報告した。そこでは、主に東アジア研究者と意見交換を行った。現地妻の慣習は、朝鮮にはなかったこと、中国の場合は、まだその領域の研究がなく、現時点ではそうした慣習の有無についてわかっていないことが明らかとなった。なお、これらの成果をまとめたものは、2008年度に財団法人東洋文庫より出版予定の *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries* (『近代移行期の東南アジア社会の自画像』) の一章に当てる予定である。

6. 到達点と将来への課題

コロニアリズム研究やジェンダー研究の進展により、19世紀後半・20世紀前半のヨーロッパの帝国主義と性規範との関係をめぐる研究が進展し、東南アジア史においても19世紀の後半以降の植民地支配の強化とともに、植民地社会における性的規範が大きく変容したことが論じられている。オランダ植民地支配下のインドネシアにおいても、上述したように19世紀の終わりごろより、ヨーロッパ本国の性モラル向上運動の影響が東インドに強く及び始め、オランダ人官僚は現地妻を持つ慣習の自粛を迫られ、オランダ東インド軍の兵舎においても、1913年について現地妻の制度が廃止された。また植民地支配を逆手に取る形で形成されたインドネシア民族主義運動においても、オランダ人がインドネシア人のニヤイを持つことは、厳しく非難された。その意味では、19世紀終わりから20世紀前半期のインドネシアでも、性をめぐる規範が大きな変容を遂げていたことがわかる。

しかし、多年にわたり外来者と交流し、欧亜混血者や華人系混血者を多数有した東インドでは、彼らが形成した文化社会がその後も存続した。性をめぐって民族的差異が強く意識されだし、ナショナリストがヨーロッパ人の現地妻を有する慣習を糾弾し始めた

1910年代以降も、ヨーロッパ人と同棲した現地人女性の数は減少しなかった。かつて、現地の村長や郡長が果たしていた役割は、欧亜混血者や華人に移った。植民地体制の成立する前夜から東南アジアの都市の社会統合に重要な役割を担ってきた欧亜混血者や華人系住民は、20世紀前半期の植民地都市においても、その役割を終焉させていなかったのである。

こうした到達点を踏まえるとき、次の二つの点が新たな課題として浮上してくる。

一つ目は、これまでの研究の中で議論されてきた、ヨーロッパ人の帝国の支配と性的規範の構築のなかで民族的差異が性的関係に強く持ち込まれるという指摘が、混血者の文化が根強く残るところでは、単一的には論じられないのではないかという点である。20世紀前半期のインドネシアの事例は、そうした差異を埋めようとする試みが、次々に生まれうることを提示している。

またもう一つは、インドネシア民族主義運動研究への課題である。これまでインドネシア民族主義運動が、1920年代には「原住民」色の強い運動になるとされ、欧亜混血者や華人系住民はそこから後退するとされてきた。しかしながら、1920年代・30年代における彼らの社会統合に果たす役割は、無視できないものがあり、民族主義運動と彼らがいかに関わったのか、改めて検討される必要がある。とりわけ1930年代に台頭するオランダとの協調をうたった民族主義運動のなかで、彼らの担った役割は改めて議論されるべきであろう。ともすれば闘って解放を勝ちえた民族主義運動が注目されがちであるが、近年指摘されているように、同時に闘わない民族主義にも、十分な光が当てられる必要がある(注14)。後者の民族主義の方が、前者よりも多様な文化集団者との共存の可能性をより有していると考えられるからである。

- (1) B. W. Andaya, “From Temporary Wife to Prostitute: Sexuality and Economic Change in Early Modern Southeast Asia”, *Journal of Women’s History*, vol. 9, no.4, (Winter, 1998), pp.11-34, and ダンピア(平野敬一訳)『最新世界周航記』(岩波書店、1992年)、369—370頁および400—401頁。
- (2) A. L. Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and Intimate in Colonial Rule*, (Berkeley, Los Angeles and London, 2002), A. J. Abalihin, “Prostitution Policy and the Project of Modernity: A Comparative Study of Colonial Indonesia and the Philippines, 1850-1940”, (Unpublished Ph.D. Dissertation submitted to Cornell University, 2003), and 井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』(講談社、1998年)。
- (3) 出典 *Johannes Rach 1720-1783: Artists in Indonesia and Asia*, (Jakarta, 2001), p.10.
- (4) 1816年の統計によると、平均で13.8人の奴隷を所有したとなっている。ちなみに、華人は平均が3.3人、その他の住民は2.8人となっている。S. Abeyasekere, “Slaves in Batavia: Insights from a Slave Register”, in *Slavery, Bondage and Dependency in*

- Southeast Asia*, edited by A. Reid and J. Brewster, (St Lucia, London and New York, 1983), p. 296.
- (5) J. G. Taylor, *The Social World of Batavia: European and Eurasian in Dutch Asia*, (Madison, Wisconsin, 1983), pp.145-158.
 - (6) Departement van Landbouw, Nijverheid en Handel, *Volkstelling 1930, VI Europeanen in Nederlandsch-Indië*, (Batavia, 1933), p.31, and “Rapport betreffende het concubinaat in het Nederlandsch-Indische Leger (Uitgebracht door de Commissie, benoemd door de Nationale Christen Officieren Vereeniging op de Algemeene Vergadering van 15 November 1909)”, p.11, Verbaal 8/4/1913/no.71.
 - (7) Vereeniging tot bevordering der Zedelijkheid in de Nederlandsche Overzeesche Bezittingen en de Nederlandsche Vereeniging tegen Prostitutie, *Een onderzoek naar den toestand van Nederlandsche Leger, uit een zedelijk oogpunt beschouwd*, (Amsterdam, 1899), p.14.
 - (8) *Java-Bode*, 5 December 1904.
 - (9) 出典 R. Nieuwenhuys, *Komen en blijven: Tempo doeloe-een verzonken wereld*, (Amsterdam, 1982), p.89.
 - (10) G. Francis, *Tjerita Njai Dasima*, (Batavia, 1896), H. Kommer, *Nji Paina*, (batavia, 1900), and F. Wiggers, *Njai Isah*, (Batavia, 1903).
 - (11) *Onderzoek naar de mindere welvaart der inlandsche bevolking op Java en Madoera, XIB3 Verheffing van de inlandsche vrouw*, (Batavia, 1914), pp.25-27, and S. S. J. Ratu-Langie, *Serikat Islam*, (Baarn, 1913), p.21.
 - (12) “Pertjampoeran Darah”, *Oetoesan Hindia*, 8 Jan. 1919.
 - (13) A. van Marle, “De groep der Europeanen in Nederlands-Indië, iets over en groei”, *Indonesië*, vol.5, (1951-52), pp.319-337.
 - (14) 例えば、山本博之『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』（東京大学出版会、2006年）。